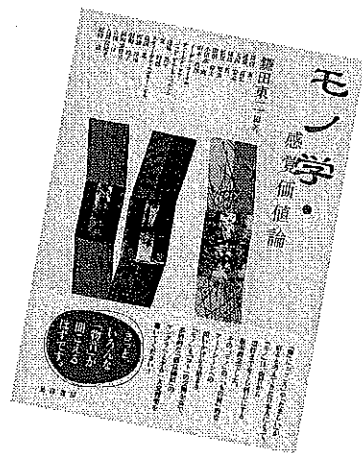


# モノの背後に広がる意味の星座

モノは単なる「物」ではなく、ある靈性を帯びた「いのち」を持った存在であるという見方

柏木博

鎌田東二 編著  
▶モノ学・感覚価値論  
11・25刊 A5判272頁 本体2900円  
見洋書房



本書は、表題にあるように「モノ学」つまりモノについての研究である。モノをどのように捉えるのか。モノは技術、経済、政治、社会、芸術、デザイン、市場など多様な要素のつぎに成り立っている。さらには、欲望や趣味といったきわめて感性的な要素をあふんでいる。

アメリカでは、マテリアル・スタディーズというモノを対象にした研究があるが、本書では「モノ学」を「スタディ・オブ・シングズ」と表記しており、アメリカでのモノ研究とはまったく異なったアプローチとなっている。

では、この研究は、どのようにモノを捉えようとしているのか。冒頭にいくつかあげたモノを捉える要素のさらに上部にある大きな視点を設定している。日本語の「モノ」には、①物質的次元、②人間的次元、③靈的次元があり、この研究では、「その三層一体的な非二元論的思考の持つ創造性や可能性」を探求するものであるとしている。たしかに、モノをフレイム・チャイルドとして位置づけるのなら、人間をどのように捉えるのかというにちがいない。モノが必要になるように思える。その結果、本書では、いろいろな大きな三つの次元へと集約され、ダイナミックな展開となっている。

そして、「モノは単なる「物」ではなく、ある靈性を帯びた「いのち」を持った存在である」という見方、「モノ派」を検証する建昌の報告の中で、確かに浮かび上がってくる。

李禹煥は、七〇年に「出会いを求めて」というテキストを書いている。彼はそこで近代芸術を「像の形象化」として「そこでは世界は理念の実現のための素材であり、植民地的領域にしかみなされな」と述べ、庄子を参照する。「庄子は、木や石を単に『木』や『石』としかみなさないとき、木や石をほとと見たことにならないという。木や石は木や石であると同時に木や石ではない。つまり木や石といえどもそれは規定性をこえた天空にも等しい計り知れない宇宙である、この見方を示している」。こうしたモノの捉え方に、それまでの西洋から接ぎ木した日本近代の美術からの解放の可能性を思考した。それは、「モノ」を「いのちを持った存在」として捉える「モノ学」の視点へと、たしかに重なる。

また、宗教における楽器と「琴」が特別な「モノ」であることをめぐって鎌田の基調講演とティスカッションが展開される。琴は「モノ」であり「コト・事」でもある。この議論は、大本教、出口王仁三郎の活動、さらには韓国で琴へと連動していく。この議論から、宗教におけるテクニクは、決して「文章」に限定されるものではないという

「いのち」を持った存在であるという「モノ」の見方を通して、モノと人間、自然と人間、道具や文明と人間との新しい関係の構築可能性を探ることをテーマにしている。また、この研究についての目的と整理を明確に提示しており、全体に明快な構成となっている。「基調講演とティスカッション」による明快な構成は、本書が、「日本芸術振興会研究補助金」交付の研究報告書といった性格を持っているからであろう。

まず、冒頭に、一九七〇年前後に日本の美術シーンに出現してきた、関根伸夫、小清水漸、菅木志雄そして李禹煥らによって展開されたのちに「モノ派」と呼ばれることになる一連の実験についての、建昌による検証と、鎌田東二とのティスカッションが置かれている。「モノ派」の存在は、久しく忘れられていたといえる。建昌の「基調講演」にもその歴史的な位置づけは、実に説得的である。

それにして、「モノ学」研究の本書が、なぜ美術「モノ派」の検証から始まるのか。「モノ」という言葉によっているからなのか。それは、「モノ派」のコンセプトの中に、「モノの「いのち」を見よ」とする「モノ学」的な視点が存在するのではないかと、鎌田のいわゆる動機のようなものによっていっている。そして、それは、

「モノ学」をめぐるとは、単なる「物」ではなく、ある靈性を帯びた「いのち」を持った存在であるという見方、モノを単なる物ではなく、靈的な存在として捉える。はたして、そのようにパラフレースしていかうかわからないが、その靈的なものとは、ペンヤミンが「コト」や「モノ」のうちにちがひ。最近、逝去した多木浩二は、それを「共同幻想」としていた。

本書のモノをめぐる議論から、モノの持つ複雑な意味の点在が、まるで星座のように広がっていることが刺激的であった。「モノ学」の以降の研究をぜひ期待したい。

(デザイン評論家)